

娘たちが消えていく

令和八年八月九日 山口仁史

帰省し玄関にたたずむ娘の瘦せた姿に胸がつまる

零細な家業のつらさを背負うことなく大きな会社に就職したというのに

大画面のテレビを備えたリビングはいつだって家族の集う場所だった

今は妻とふたり

キッチンに連なり、にぎやかに食卓を囲んでいた

たくさん食べて汗っかきで 娘たちはどんどん大きくなるものと思っていた

この部屋で、今も妻はかわらず娘たちとスマホで談話している

仕事の悩みなど相談に乗っているようだ

そんな光景を眺めながら、私は仕事終わりの一杯に酔う

帰省した娘たちと会話するのもリビング

今も家族の集う場所は変わらない

たわいない会話 そして笑い

彼女たちが元気に生きていることを実感する

住まいへ戻る娘を玄関口まで見送る 彼女は必ず振り返り手を振る

実家を出て十年 今も変わらぬ親子の合図

いつか名前が変わるかも いつか家族ができるかも 遠くに描く彼女の人生

強い人になってほしいと硬い口調の名前をつけた

逞しい人生を送ってほしいと勇ましい干支の生まれに感謝した

「しっかり食べて元気に暮らせよ」

最後に投げかける言葉が詰まってしまう

こみ上げてくる涙声を悟られないように

最寄りの田舎駅に車で送るのは妻の役目

車内のスピーカーには娘の携帯の音楽が繋がる 娘の大好きな楽曲たち

車を降り 改札を通り ホームへの階段を登る

ブルートゥースで繋がった音楽が途切れながら遠のいていく

娘の消えた姿とともに

見えなくなった彼女たちの姿

仕事の苦労も生きる苦労も彼女たちの成長の姿と思い

また再開できる日まで お互い荒波にもまれ突き進もう

また一緒にリビングで過ごし 笑い合える日が来るように